

巻 頭 言

歴史分科会長 寒川高校 澤野 理

昨年は、歴史教育をめぐるさまざまな問題について考えることが多い1年でした。高校現場に直接関係することとしては、次期指導要領改訂で新科目となる(かもしれない)「歴史基礎」をめぐる問題があります。また、その裏で(多分に政治的な色合いの濃い)「日本史必修化」への動きについても注目すべきでしょう。前者は、2006年に表面化した「世界史未履修問題」を機に、日本学術会議の旗振りで日本史と世界史を統合する新科目の設置が提言されたことにはじまります。昨年、大まかな構成案も発表され、ここでは、従来の「知識の暗記」を中心とした授業方法から脱却も提言されています。理想は、「ごもっとも！」なのですが、実際の現場で「日本史」「世界史」を「統合」し、かつ、「新たな手法」で教えなければならないという場面を想定すると、いろいろな混乱(教師にとっても生徒にとっても)が予測されます。「それは、お前のような年寄りがいなくなれば自然消滅するので問題ない！」という声が聞こえそうです。本当にそうでしょうか。昨年の『歴史評論』10月号の特集、「歴史教育の担い手をどう育てるか」を読んだところ、少なくとも教育学部(教員養成課程)の学生に求められる教科(科目)に関する専門教養科目(史学概論・各論などといった授業)の単位数は、私の学生時代と比べ半減しているとのことでした。極端な話をすれば、高校で「日本史」を選択せず、大学で8単位程度しか歴史系の授業を受けていなくても、「社会科」や「地歴科」の免許を取得し、児童・生徒に「歴史」を教えることができるという現状のようです。これでは、「歴史基礎」どころか、「日本史」の必修化も心配になってきました。従来、「歴史教育」という語で語られるのは、初等・中等教育の分野が中心であったという印象が強かったのですが、今回は、大学における歴史教員の養成も大きな問題となってきました。

その一方で、ここ数年、現場での世代交代は急ピッチで進んでいます。前述のような現状を踏まえると、われわれの使命には、目の前の生徒に歴史を教えるだけでなく、新しく仲間となった若手のスキルアップをサポートすることも大きな比重が置かれてきたといえるでしょう。ここ数年、同じことを書いていますが、われわれ社会科部会歴史分科会の各種活動は、現状では数少ない「歴史教師」としての力量を高めるための場です。実際、一昨年の全歴研神奈川大会を機に、少しずつではありますが活躍の場を広げているようです。また、若手を導いてくださるベテランの先生方にとっても、歴史分科会は刺激的な場であると確信しております。

早いもので、歴史分科会長に就任してから4年の月日が経ちました。なぜか2015年度も分科会長を続けることになってしまいました。先輩の先生に伺ったところ、5期連続というのは、(有難くも何ともありませんが)最長記録ということだそうです。従来であれば、新しい分科会長と交代し、「普通の」世界史教師に戻りたいところですが、もう少し歴史分科会の未来のために働かせていただくという決意を新たに表明することで、巻頭言とさせていただきます。今後ともよろしくご厚意申し上げます。